

「核兵器と私たちの未来 ーウクライナ危機が問いかけるものー」

「ユークレインのニュースを見たか？」

そう叫びながら寮の自室をノックしてきた同学科の友人は、血相を変えながら「ついに戦争が始まってしまった」と、泣き叫んでいた。

ロシアによるウクライナ侵攻が始まった2022年2月、私は大学院進学のため米国カリフォルニア州にいた。私の所属する学科は、安全保障に深く関わっていることもあり、周りの学生は普段から国際問題に意識を向けている人が多い。ウクライナ危機が始まったと報道された日の夜、寮の共同キッチンにいた者たちはこの話題で持ちきりだった。至る所から聞こえる「ユークレイン」という言葉が、日本語で言う「ウクライナ」の英語発音であることを、恥ずかしながらその時知った。

それからの大学院の講義は、シラバスの予定が変更され、ウクライナ危機が多く取り扱われた。国際法やメディア論など、様々な学術分野と今回の戦争を結び付けた意見交換が飛び交う日々が続いた。その傍ら、この戦争の被害を受けている人々が、日常生活のすぐ隣にいることに気づいた。同学科のロシア人学生は、「銀行口座が凍結されてしまい、カードも使えない」「次はいつ母国に帰れるのだろうか」「周囲からの目が怖い」と涙ぐみ、「今後どうやって生きていけば良いか分からない」と毎晩寮のソファで息を詰まらせていた。

その時、人生で限りなく一番近くに、「戦争」を感じた。

この目で戦火を見て、爆弾の威力を体験したわけではない。しかし、「戦争」が戦場というフィールドで終わらないこと、戦地から離れた地でも、その影響を受け傷を負う者がいるリアルを目の当たりにした。そして、火蓋が切られた数か月後、ウクライナ危機で加速した円安により、私の米国生活も経済的な悲鳴を上げた。

ウクライナ危機から3か月が経過し、夏季休暇前最後に行われた大学院のある講義で、「核兵器は存在すべきか」という問いが教授から投げかけられた。米国学生6名、ロシア学生1名、日本人の私、計8名と小規模な講義だったが、その場にいた全員が「核兵器はなくすべき」に挙手した。この結果は、正直意外であった。核兵器保有国で生まれ教育を受けてきた学生は、てっきり「国家を守る核兵器は必要だ」と考えているのでは、と想定していたからだ。しかし彼らは、核兵器がもたらす安全保障上の利益とリスクの2面性を理解した上で、「NO」と結論付けていた。彼らの回答の背景には、ウクライナ危機によって核保有のリスクを

2022年7月31日

再確認したことがあった。ロシア側がもくろむ核兵器利用による国際秩序への影響、原子力発電が攻撃を受けた場合に、原子炉の放射性物質漏えいが及ぼす人的被害を考慮し、「NO」と回答する学生もいた。また、核兵器がもたらす被害の実相を訴え「NO」と言う者もいた。その学生は、以前私に日本で学んだ核問題を教えて欲しいと声をかけ、長崎原爆のプレゼンテーションを聞いていた、ウクライナ危機が始まったあの日に寮のドアを叩いた、あの彼だった。

このウクライナ危機は、「戦争は他人事ではない」と私に呼びかけた。そして、存在する限り使われる可能性のある核兵器が、本当に必要かと我々に問うているようにも感じる。核兵器はある一定、保有国並びに同盟国に核抑止の効果を与え、第3次世界大戦の勃発を未然に防いだ、という説もある。また、核問題への学びを進めていくうちに、完全な核廃絶が現状困難ではないかと感じることもある。

だが1度、純粹にウクライナ危機が投げかけた問いのみを、自身に尋ねてみる。我々の未来に、核兵器は必要だろうか。これからの人生を、核兵器と共にしたいのだろうか。

私の答えは、小学校6年の修学旅行で、初めて長崎原爆資料館を訪れた時に、既に出ている。資料館で目に飛び込んできたもの、その全てが衝撃的だった。黒こげのお弁当箱、溶けた瓶に張り付いた人骨、崩壊した浦上天主堂を再現した展示。言葉が出なかった。「当初の投下目的地は小倉だった」という説明を聞き、更に驚愕した。生まれ育った福岡の地に落とされる予定だったことを、今日まで知らず、ナガサキを知らずに、12年間も生きてきたことに恥ずかしさを覚えた。

それまで戦争とは、遠い昔の出来事だった。国語の教科書で読むもの、と自分の世界と完全に切り離し、フィクションの世界という感覚までであった。しかし資料館を訪れ、初めて戦争をリアルとしてとらえた。中学2年生で長崎に転校し、「核なき世界」を訴える被爆者の切なる願い、ノーモアナガサキと声を上げる若者の姿を近くで見て、戦争と核兵器を「自分ごと」に感じた。

「自分ごと」と捉えた、この驚異的な破壊力を持つ兵器が、未だに1万2千発以上存在している。そして、その不安定な核基盤の上に成り立つ我々の生活が、今のリアルである。

「そのリアルを塗替え、核の脅威と人間が共存しない未来を作りたい」、これが私の導き出した答えだ。被爆地から離れた地で学ぶ今も、その夢に向かって歩み続けている。この志は、原爆の実相を語り継いできた、祈りと平和の地から始まったのだ。

ナガサキから始まった私の「未来」に、核兵器は必要ない。